



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3234 号 2016.9.4 発行

パラシンボルマーク、リオに登場 選手の強い意志表現 朝日新聞 2016年9月3日



コパカバーナに設置されたパラリンピックのシンボルマーク「スリー・アギトス」と公式キャラクターのトム＝2日、金川雄策撮影

コパカバーナビーチに設置されたパラリンピックのシンボルマーク「スリー・アギトス」。手前は公式キャラクターのトム＝2日、金川雄策撮影

7日（日本時間8日）のリオデジャネイロ・パラリンピック開幕を間近に控えた2日、リオの観光名所、コパカバーナの海岸にパラリンピックのシンボルマークが登場した。大会関係者が集まり、除幕式が行われた。



マークは、「スリー・アギトス」と呼ばれる。アギトスとは、ラテン語で「私は動く」の意味。曲線が動きを象徴し、パラ選手の常に諦めない強い意志

を表現している。

国際パラリンピック委員会のクレーブン会長は、「コパカバーナの景色とともに、パラの意義、リオの情熱が世界に伝わると期待している」と話した。（斉藤寛子）

旬の果物たっぷりパフェが人気 障害者スタッフ働く専門店 鳥取

産経新聞 2016年9月3日

パフェを提供する岡村さん。「障害者が当たり前働く場に」と話す旬の果物がたっぷり載ったパフェが評判の鳥取市のフルーツ専門店「フェリース」が、女性客を中心に人気を集めている。NP O法人が運営し、障害者スタッフたちが心のこもった味を提供している。

「フルーツの種類が豊富で驚いた。おいしくて子供たちも大喜びです」。男児2人を連れて来店した雨川あかねさん（28）が、注文したパフェを前に笑顔を見せた。鳥取特産のナシやブドウをはじめ、全国から集めた約10種類の果物などを盛り付けた680円のパフェは人気の的だ。



フルーツをふんだんに使ったワッフルやフレンチトーストも看板商品。注文を受けてから果物をカットするのが店のこだわりで、店長の岡村恭兵さん（28）らが味を確かめ、納得できなければ使わない。

平成24年の開店当時は「モーニングセットやケーキを出す普通の喫茶店だった」と岡村さん。売り上げが伸びず、26年にフルーツ専門店としてリニューアルした。「都会の有名店にひけを取らない果物を、鳥取なら手頃な値段で提供できると思った」

仕入れる果物などの試行錯誤を繰り返すうちに少しずつ評判が広まり、今では多い日で200人が来店するまでになった。

知的障害などがある20～50代の男女8人が調理や接客を担当。あえて「障害者が働くカフェ」とのPRはせず、自然に働く環境づくりを目指す。岡村さんは「障害者が誇りを持って、当たり前のように働いてほしい」と話している。

「障害者×感動」に疑問符 NHK「バリバラ」反響続く 真田香菜子、佐藤恵子 朝日新聞 2016年9月3日



「バリバラ」の一場面。視聴者からの意見も画面上で紹介された



障害者の姿を意図して感動的に描くメディアの手法に疑問を投げかける番組を、NHKが生放送した。8月27～28日に



放送されたチャリティー番組「24時間テレビ39『愛は地球を救う』」（日本テレビ系）の終盤と重なる時間帯。両方の番組に出演した障害者は「多くの方が障害者のことを考える日。メディアによる障害者の取り上げ方が変わることにつながれば」と話す。

NHKの番組はEテレの情報バラエティー「バリバラ」。「バリアフリー・バラエティー」の略で、障害者らが出演し、様々なテーマについて笑いを交えつつ本音を語る。2012年に始まり、毎週日曜夜に放送している。

28日は午後7時から「検証！〈障害者×感動〉の方程式」と題して30分間生放送。出演者らは「笑いは地球を救う」と書かれた黄色いTシャツ姿で登場し、司会者が「あの番組の裏でやってますから」と話すなど、24時間テレビを意識した演出を重ねた。

ちょうど24時間テレビがフィナーレを迎える時間帯。SNSなどでは放送前から「バリバラが24時間テレビにけんかを売っている」と話題になった。放送後も「NHKやるなー。共感できた」「ずっと考えていきたいテーマをもらった感じ」と、反響が続く。

番組では冒頭、豪州のジャーナリストで障害者の故ステラ・ヤングさんのスピーチ映像を流した。ステラさんは、感動や勇気をかき立てるための道具として障害者が使われ、描かれることを、「感動porno」と表現。「障害者が乗り越えなければならないのは自分たちの体や病気ではなく、障害者を特別視し、モノとして扱う社会だ」と指摘した。

にわか仕立ての芸人ランナーは「つらそう」なだけ

私は毎年恒例となった某局のチャリティー番組を見るのは苦手である。チャリティーで集めたお金がさまざまな団体の役に立っていることは評価できるが、人が頑張っている姿を見るのはしんどい。メインのマラソンも健康に悪そう。頑張ることも素晴らしいが、つらくなれば一度立ち止まって、中止する勇気も必要だ。機会を改めて再度挑戦してもよいし、一生再挑戦しなくたってよいのだ。



リオ五輪女子マラソンのレース後、笑顔を見せる14位の福士加代子(右)と19位の田中智美=三浦博之撮影

リオ・オリンピックの女子マラソンで、日本人として最初にゴールした福士加代子選手が「もうやんねえ。走らねえ」と語って騒動になったが、正直な気持ちを話してくれてよかったと思う。むしろ、金メダルを逃して号泣する選手が気の毒に思えた。アスリートの多くがベストを尽くして頑張ったので、結果はその時の運次第と思って素直に感動していた。そして、日本選手がメダル数で史上一番の結果を残せたのは素晴らしいことだ。

そんな感動は何年も努力をしてきた選手だから生まれるのであって、数カ月前に指名された芸人さんが、マラソン競技の2倍以上の距離を“激走”する姿を見ても「つらそう」としか思えない私は変わっているのだろうか？

「感動ポルノ」という問題提起

さて恒例のチャリティー番組にNHKのEテレの情報バラエティー番組「バリバラ」(バリアフリー・バラエティーの略)が、「検証!『障害者×感動』の方程式」と題した生放送をぶつけてきた。番組では、骨形成不全で車いす生活であったが、教員もしていた、ジャーナリスト兼コメディアンのステラ・ヤングさん(2014年暮れに急死)が「感動ポルノ」として問題提起したビデオも紹介された。

「感動ポルノ」とは「清く正しい障がい者?」が頑張る姿を感動の対象にすることが差別的であり、「障がいは体や病気よりも、私たちを特別視してモノ扱いする社会の方」との趣旨である。チャリティー番組が苦手な私にとっては“まさに的を射た”指摘である。「障害者の感動的な番組をどう思うか?」という質問に、「好き」と答えた健常者が45%に対し、障がい者は10%であり、どうもこの手の感動ものは障がいを持つ方には評判が良くないらしい。

60歳を超えたら誰でも障がい予備軍

そもそも、障がいとは何なのだろうか? 世界保健機関(WHO)憲章では「健康」とは「肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にある」と定義している。それから外れると不健康・障がいなのだろうか? 私は5年ほど前に網膜剥離の手術をし、左目に人工水晶体が入っている。幸い血圧も血糖値も正常だが、WHOの定義では健康ではなさそう。60歳を超えらるといつ脳梗塞(こうそく)や心筋梗塞に襲われ、まひを起こすかわからない。いわゆる障がい予備軍である。

身体の障がいははた目にわかりやすいが、精神的な障がいはわかりにくい。会社でバリバリと働いて金を稼いでいても、パワハラ・セクハラを繰り返すのは障がいかもしれない。そう考えると、ヤングさんの言うように健康にこだわりすぎて、障がい者を特別視する社会が問題だろう。生まれてしばらくすると、人は何らかの障がいに悩まされ、程度の差はあっても誰も完全ではないと考えたほうが気は楽で、高齢になってもひたすら健康を追い求めるのも楽しくなさそう。一見健康な我々からは言い出しにくいこのような問題に対し、「感動ポルノ」という強烈なメッセージを発信してくれたヤングさんには素直に拍手

したい。



あのチャリティー番組に似せた？黄色いTシャツを出演者に着せたEテレの挑戦的な態度にも感動させられる。私が最も不思議だったのは、出演者の後ろにいた寝たきりのカップである。何のためにそこにいるのかわからなかったが、寝たきりのコメディアンといううわさである。

石蔵文信 大阪樟蔭女子大学教授 いしくら・ふみのぶ 1955年京都生まれ。三重大学医学部卒業後、国立循環器病センター医師、大阪厚生年金病院内科医長、大阪警察病院循環器科医長、米国メイヨー・クリニック・リサーチフェロー、大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻准教授などを経て、2013年4月から現職。循環器内科が専門だが、早くから心療内科の領域も手がけ、特に中高年のメンタルケア、うつ病治療に積極的に取り組む。01年には全国でも先駆けとなる「男性更年期外来」を大阪市内で開設、性機能障害の治療も専門的に行う。夫の言動への不平や不満がストレスとなって妻の体に不調が生じる状態を「夫源病」と命名し、話題を呼ぶ。また60歳を過ぎて初めて包丁を持つ男性のための「男のええ加減料理」の提唱、自転車をこいで発電しエネルギー源とする可能性を探る「日本原始力発電所協会」の設立など、ジャンルを超えたユニークな活動で知られる。「妻の病気の9割は夫がつくる」「なぜ妻は、夫のやることなすこと気に食わないのか エイリアン妻と共生するための15の戦略」など著書多数。

障害者も運営、プロレス大会 来月31日

読売新聞 2016年09月03日



「川崎を盛り上げたい」と意気込むヒートアップのメンバーら(川崎市役所で)

「地域密着、社会貢献」を掲げ、障害者支援に積極的に取り組んできた川崎市のプロレス団体「ヒートアップ」が、10月31日に市とどろきアリーナで、プロレス大会「KAWASAKIを照らす希望の光～奇跡を起こせ☆2016～」を開催する。市内の障害者にも運営に参加してもらい、最大収容人数6500人の大規模イベント

に初挑戦。選手たちは「総力戦で川崎を盛り上げたい」と意気込んでいる。

ヒートアップは、同市多摩区出身のレスラー田村和宏さん(36)が2013年に旗揚げ。新百合ヶ丘を中心に興行を行い、今年1月には麻生区に道場を設立した。

ダウン症と心臓病を患う1歳上の姉と育った田村さんは、団体設立当初から売上金の一部を障害者支援に寄付し、チケットもぎりなどに障害者を雇用してきた。今大会でも寄付を行うほか、「仕事をすることで自信をつけてほしい」と、会場設営や最寄り駅からの誘導などに職域を広げ、障害者に仕事を依頼する考えだ。

当日は6試合を行い、同じ川崎の女子プロレス団体「ディアナ」のジャガー横田さんや、藤原喜明さん、藤波辰爾さんなどの人気レスラーが登場。田村さんはメインイベントで、強豪レスラーの鈴木みのるさんと対戦する。

新興団体のヒートアップは、過去の最多観客動員が400人程度で、今大会はその15倍以上の会場規模となる。田村さんは「『無謀だ』という人もいるが、挑戦することで市民に希望を与えたい」と話した。

午後6時半開始。チケットは前売り3000～1万円で、川崎市民は証明書の提示で1000円引き。障害者手帳を持つ人や高校生以下は無料。会場には、地元野菜などの販売ブースも設ける。問い合わせはヒートアップ(090・5430・2056)。

障害者向けネット119番、新システム導入 神戸

神戸新聞 2016年9月2日

神戸市消防局は、聴覚、音声・言語に障害がある人がスマートフォンを使って消防・救急通報できる新たなシステムを導入した。市内の地図情報システム会社「ドーン」が開発した「NET119」。全国標準のシステムで、神戸市以外の地域でも、導入している消防本部があれば直接通報が届くようになった。

事前登録制で、専用画面から「救急」「火事」「その他」のボタンを選んで押して通報す

る。衛星利用測位システム（GPS）による位置の特定、チャット機能を使ってより具体的な通報内容の伝達もできる。

聴覚、言語障害者が消防・救急通報時に利用できる「NET119」＝神戸市消防局

市消防局は2012年度から同様の機能があるドーン開発の「Web119」を導入したが、いったん神戸市で登録すると、市外から発信しても市消防局経由で現地の消防に通報が入る仕組みだった。

同社は、総務省消防庁の検討を受けて改良し、15年4月から「NET」の運用を開始した。現在、全国で約70の消防本部が導入し、県内では4月から姫路市消防局が始めた。

このシステム以外で聴覚、音声・言語障害者が通報する際は、ファクスが一般的。「Web」の登場で、自宅以外から通報しやすくなると期待されたが、現在の市内の登録者は約70人ととどまる。「NET」は操作を覚えるためのテスト通報ができるなどほかにも改良された。

市消防局司令課の担当者は「本人以外が外出先で『人が倒れている』と通報したケースもあった。普及を進めたい」とする。

22日午前10時から市役所危機管理センターで新システムの説明、登録会を開く。申し込みは14日まで。同課TEL078・325・8519（若林幹夫）



性暴力被害の支援情報集約 検索サイトが開設

神戸新聞 2016年9月3日

医療関係者や行政職員らを対象に開かれた研修＝尼崎市南武庫之荘11



性暴力被害者支援センター・ひょうごが開設したホームページ「バーチャル・ワンストップ支援センター」

性暴力被害に遭った人に必要な支援を橋渡し

する団体「性暴力被害者支援センター・ひょうご」（尼崎市）が、兵庫県内の支援機関を集約したホームページ「バーチャル・ワンストップ支援センター」を開設した。地域や被害の内容、時間の経過に合わせ、支援機関を検索できる。



同団体によると、性犯罪や性虐待、家庭内暴力（DV）などの性暴力被害への対応は、被害の内容や被害からの時間経過によって支援機関が異なるため、心身ともに傷ついた被害者が病院などをたらい回しにされるケースがあったという。また、同団体が県内全域をカバーするのは困難なため、支援に地域格差があったという。

ホームページには2日現在、県警や子ども家庭センターなどの関係機関のほか、婦人科や小児科がある病院など計21機関が登録。支援を受けたい地域▽被害内容▽被害からの経過時間▽現在困っていることーなどの質問に答えていくと、支援可能な機関とその連絡先が表示される。

同団体は2013年、県立尼崎総合医療センター産婦人科医の田口奈緒代表（46）を中心に発足。被害者の相談や面談、病院への付き添いなど急性期支援を行っており、昨年の電話相談は約200件、来所者数が延べ38人だった。

また、関係機関にホームページの活用法を知ってもらおうと、同団体は8月下旬から尼崎市内の病院で研修会を開始。12月までに県内計6病院で実施する予定で、田口代表は

「各機関の役割を見つめ直してもらおうとともに、協力を呼び掛けたい」と話している。
ホームページは「バーチャル・ワンストップ支援センター」で検索する。(斉藤絵美)

(ジャーナルM) 障害のある2人を育てて

朝日新聞 2016年9月3日



柴田靖子さん

■MOM'S STAND (ママズ スタンド) 9月号

健常児に近づけなくては。でも、2人とも療育なんて無理——。東京都の柴田靖子さん(51)には、重度の障害がある2人の子どもがいます。異なる環境で育てる中

で、大きな発見があったと言います。

柴田さんの社会人の長女(19)と、中学3年の長男(14)は生まれつき、脳内に髄液がたまる水頭症という障害がある。症状は人により様々だが、2人は言葉を発せず、車いすを使い、生活全般に介助が必要だ。だが、育ってきた環境は大きく異なる。

長女は1歳前から親子で療育施設に通い、同様の障害がある他の子と共に歩行や発話の訓練を受けた。「発達させて健常児に近づけようと必死でした」と柴田さんは語る。

■一般の保育園に

5歳になる直前に長男が誕生。全てに介助が必要な日々で疲れた。「2人とも療育なんて無理。もう息子は発達しなくても、元気に育ってくれれば」と、生後7カ月で近所の一般の無認可保育園に入園させた。「捨て子をするような重い気持ちで」預けた初日、迎えに行くと、他の子に紛れて見分けがつかなかった。療育中心の生活で、健常児と全く接点なかった柴田さんには、目からうるこが落ちる思いだった。

その後、特別支援学級に通う小1の長女を放課後、地元の小学校の学童保育に預けた。療育訓練を受けても目の前の物に手を伸ばせなかった娘はブロック遊びに熱中し、職員の間を見て静かに話を聞くことを「勝手に」学んだ。

柴田さんの「健常児像」も崩れた。何でも問題なくできると思っていたが、それぞれ個性があり、ぶつかりあい、「スゲー」とほめあって育ち合うことに初めて気づいた。

「特別な場所で無理なことを克服させるより、多様な人間関係の中で、できないことは助けを借りる力をつけてやれば、社会でも生きていけるのではないか」。幼少期に集団の中でもまれ、たくさん葛藤する経験が必要と感じた。

■分離って必要？

障害の早期発見、療育という傾向にある現在、「違い」を理由にいじめられないように、迷惑をかけないようにと、「専用コース」に誘導される流れが広がる。

長女は学童保育を退所後、健常児と日常的に過ごす場がなくなった。特別支援学校で義務教育を終え、現在は福祉作業所に通所する。「いったん分離されると『合流』は本当に困難。大人が時折設ける『交流』では、友達になるどころか、関われない存在だと再確認させる面もある」と話す。

こうした分断が、「障害者は不幸」という考えで引き起こされたとされる相模原市の障害者施設での殺傷事件や、容疑者に同調する一部の世論の背景にあるとみる。

長男の就学時にも教育委員会から特別支援教育を勧められたが、学区内の公立小・中に進んだ。鉛筆を握ったまま動かさない手を介助者に支えてもらって文字を覚え、今ではタブレット端末の文字盤アプリで自由に会話もできる。冬には高校受験に挑戦する。

一方の長女は、問いかけに、限られたジェスチャーで答える形で会話する。

しゃっくりのように突然、所構わず声が出るチックの症状もあるが、それを理由に外出



を控えることはしない。「居合わせた人にはお気の毒と本気で思います。半面、娘の声が、高齢者や赤ちゃん連れのお母さん同様、多様な人の存在を知らせ、社会を鍛えることにつながってほしいと願う気持ちもあるのです」（前田育徳）

福祉施設に安全管理講習 北九州市 防犯対策や心のケア 読売新聞 2016年09月03日

神奈川県相模原市の知的障害者福祉施設で入所者らが殺傷された事件を受け、北九州市は、市内の福祉施設を対象にした安全管理講習会を同市戸畑区で開いた。障害者や高齢者の入所施設など約250施設の関係者が参加し、防犯対策や入所者らの心のケアなどについて学んだ。

県警安全安心まちづくり推進室の佐矢野俊室長が防犯対策を解説。来所者へのこまめな声かけや、防犯カメラを設置する際に「カメラ作動中」と表示することの効果を紹介し、「地域との連携を深めることも重要」と呼びかけた。

また、市立精神保健福祉センターの三井敏子所長は、事件後に障害者福祉施設の入所者らが不安を抱くことがあることを指摘。「じっくりと話を聞き、『きっと安心に暮らせるようになる』と対応することが必要」と説明した。

災害弱者の避難 行政の役割学ぶ

河北新報 2016年9月3日



ワークショップを通じて災害弱者の避難支援策を探る自治体職員

高齢者や障害者など災害弱者の避難支援に関する自治体関係者向けの研修会が2日、青森市で開かれた。青森県と消防防災科学センター（東京）の主催。台風10号で高齢者施設の入所者が多数亡くなった岩手県岩泉町の事例にも触れ、素早い避難の呼び掛けや、平常時から施設や地元防災組織と連携し避難対策を充実させる重要性を再確認した。

県内16市町村の危機管理、福祉関係担当職員29人が参加した。社会安全研究所（東京）の担当者が、死者の6割が高齢者とされる東日本大震災などを例に、災害弱者の安全確保の課題を解説。市町村が作成する「要支援者名簿」を活用した速やかな情報伝達と安否確認を行うよう求めた。

4班に分かれての実践型講習では「事前避難」「避難支援」「発生後の生活支援」の3段階を想定。「台風10号のとき、広報無線が雨の音で聞こえなかった」といった事例を挙げながら、お年寄りや障害者、子ども連れが抱える不安や問題点と行政の役割を話し合った。

社会安全研究所の福井敏夫応急対策研究部長は「岩泉町の例のように、避難が遅れると多数の犠牲者が出てしまう。避難の呼び掛けは勇気が要る判断だが、（市町村は）早めの避難準備、行動へと誘導してほしい」と語った。

保育施設で男児死亡...職員不足を県が再三指摘

読売新聞 2016年09月03日

千葉県は2日、同県君津市空師の認可外保育施設「ゆいまーる」（定員15人）で7月、生後11か月の男児が就寝中に嘔吐し、死亡したと発表した。

県は必要な人員が配置されていなかったとして、児童福祉法に基づき8月29日付で施設に改善勧告を行った。施設は過去3回、職員不足を指摘されており、県は10月中旬にも第三者検証委員会を発足させて調べる。

県によると、7月17日午後4時45分頃、男児が布団の上で嘔吐しているのを男性保育士が見つけたが、搬送先の病院で死亡が確認された。午後2時頃にミルクを飲ませ、昼寝をさせていた。県警が司法解剖したが、死因は不明という。男児に目立った外傷はなか

った。 男児が死亡した認可外保育施設「ゆいまーる」(君津市立師で)

施設では男児を16日午後8時半から17日午前4時過ぎまで預かった後、母親から「病院に行きたい」と急きょ依頼され、先に予約されていた別の2歳児とともに同日午前11時から保育士1人で預かった。国の基準では、子供を2人以上預かる場合、職員2人以上を配置しなければならない。

県は施設に対し、開設された2011年度と翌12年度に基準通りの人員配置を求め、13年度以降はいったん改善されたが、15年度に再び改善を要請。この際、「シフト調整で対応する」との報告を受けたが、書類確認だけで、立ち入り調査は行っていなかった。事故後の8月9日に立ち入り調査した際は、9人を1人でみていた。施設側は県に、「職員を募集しているが集まらない」と説明したという。

施設の鶴ノ沢大樹代表(40)は取材に、「気づくのが遅かったかもしれないが、目を配っていたのは間違いはない。(亡くなった男児の)家族にはできる限りのことをしたい」と話した。



徘徊見守りアプリ NDソフトウェア ペッパー使い職員に通知

日本経済新聞 2016年9月3日

介護・福祉施設向け業務支援ソフトのエヌ・デーソフトウェアは、ヒト型ロボット「Pepper(ペッパー)」を使い、介護施設での夜間見回り負担を軽減するアプリを開発、サービスを始めた。生産年齢人口の減少で今後、介護職員の人手が不足すると見込まれており、ロボットを使って介護現場の負担を軽減する。開始したサービスは「徘徊(はいかい)みまもりアプリ」。ペッパーのセンサーで夜間に徘徊する入居者の姿をとらえ、「こんな遅くにどこにお出かけですか？」などと声をかける。同時にメッセージアプリやメールを使って、複数の職員に徘徊者の存在がいることを通知する。職員が現場に向かっての間、ペッパーが徘徊中の認知症患者と会話して、その場で引き留める。アプリは無償で、ソフトバンクロボティクス(東京・港)が運営する「ロボアプリマーケット for Biz」からダウンロードして使用する。

大阪教育大に教育協働学科、教養学科を廃止

読売新聞 2016年09月03日

大阪教育大(大阪府柏原市)は2日、2017年4月から教育学部の「教養学科」(募集人員405人)を廃止し、「教育協働学科」(同350人)を新設すると発表した。一方で、教員養成課程の募集人員を計25人増やす。

文部科学省が昨年6月、国立大の教員養成系学部のうち、教員免許を取得しなくても卒業できる「ゼロ免課程」の見直しを求めていたことを受けた。

大教大はゼロ免課程にあたる教養学科を廃止。新設する教育協働学科では教育関連の単位を大幅に増やし、心理学や社会福祉、スポーツなどの専門家として、学校と協力して子供らを支える人材を育成する。

新学科も教員免許取得が必須ではないが、大教大はスクールカウンセラーやスポーツ指導者などとして教育現場で活躍してもらうことを想定。「教職員と外部の専門家が協力して問題解決に当たる文科省の『チーム学校』構想を担う人材になりうる」としている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

